

がんばろう  
NIPPON

確かな一歩を踏み出そう

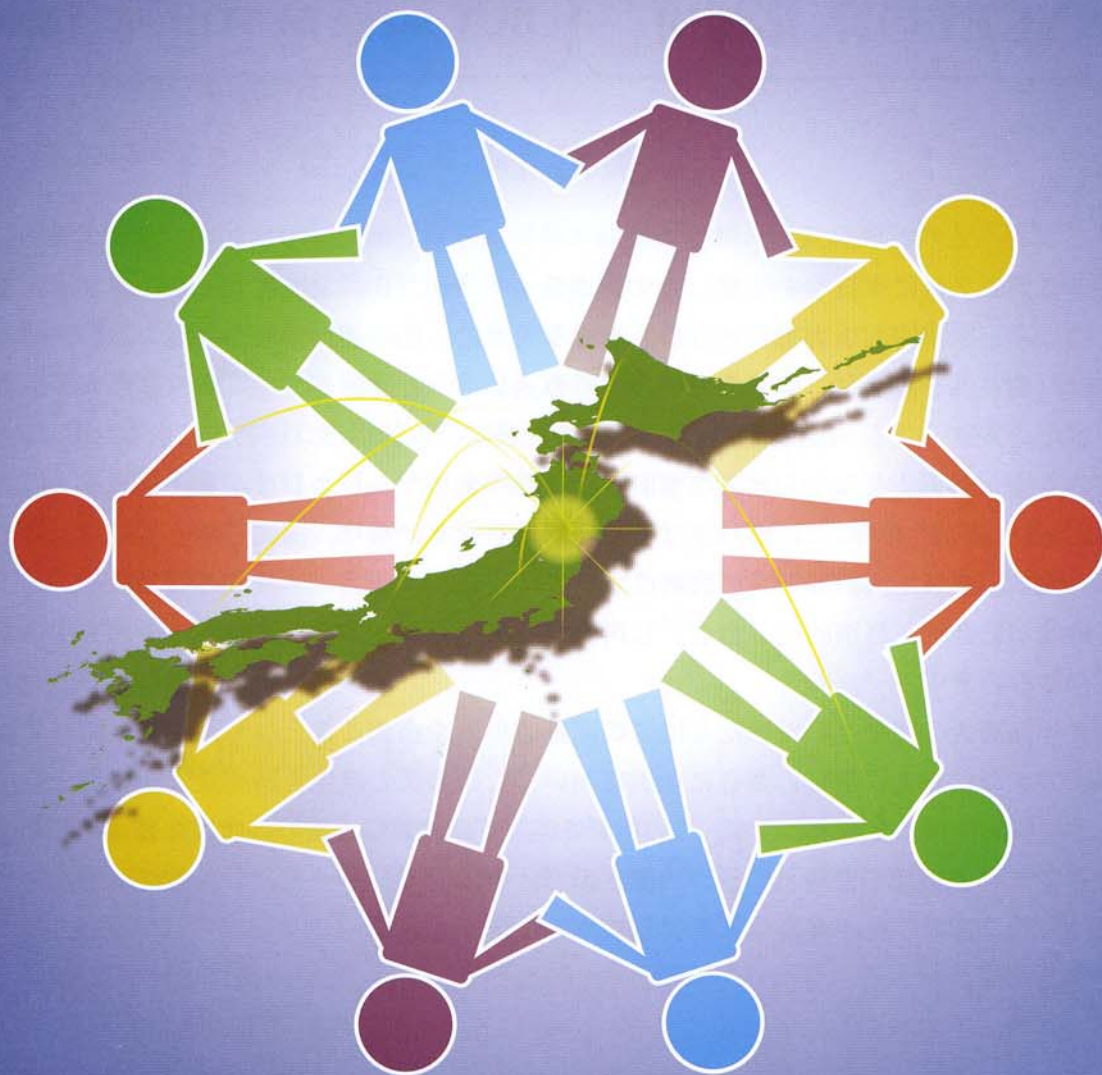


Junior Chamber International Japan

公益社団法人日本青年会議所

# 東日本大震災復興指針

～「自立」した新たな東北へ向けて～



Junior Chamber International Japan



## 【東日本大震災復興指針】 4つの柱

**I 私たちは 3.11 を忘れない**

**「復興創造フォーラム」**

**II 子どもたちの笑顔のために**

**笑顔デザインプロジェクト**

**III 被災JCの力強い再生へ**

**JAYCEEの絆 応援団**

**IV 社会的・経済的な「自立」へ**

**BUY made in TOHOKU 運動**

### 【はじめに】

平成23年3月11日に東日本を直撃したマグニチュード9.0の大地震とそれに伴う巨大津波により、多くの悲しみと絶望的な現実をもたらした東日本大震災。この計り知れぬ脅威に対し、地震翌日より日本JCは対策本部を設置し、全国の青年会議所のメンバーと連携をし、復旧・復興支援活動を行ってまいりました。スピーディーな物資の収集・供給や、多くの人的ボランティアによる活動により、「生き抜くための支援」が可能となり、地道な復旧活動は進みました。しかしながら、東日本大震災から月日の経過とともに、メディアなどに取り上げられる回数も徐々に減り、国民の関心も以前と比べ少なくなってきました。東日本大震災からの復興については、まだまだ長い年月が必要であることは間違いなく、被災地域が社会的・経済的に「自立」し再生する真の復興へ向けた運動が、今後も中長期にわたって必要とされるのです。

そこで、青年経済人の団体として私たちはこの運動の歩みを止めることなく、被災地域に生まれ、今も住み暮らす方々の自立を目指し、さらに全国においてこの震災の風化を防ぐことを目的とし、ここに「東日本大震災復興指針」を策定します。この指針を基に「四度目の奇跡」へ向けた確かな物語を描き、夢と理想から生まれる信念を希望という灯に置き換え、全国のメンバーを通じ各地に灯をともし、行動に移すことにより、日本の真の復興へと繋がるものと確信します。

### 【JCによる継続的な支援活動のカタチ】

上述した様に日本JCでは中長期に渡り、被災地域が社会的・経済的に自立できる支援活動に従事する必要があります。自立から多くの希望を生み出し、被災地に住み暮らす人々が手と手を取り合い新しいまちを創り上げていくことにより、【真の復興】へと導かれます。被災地の自立のために、日本全国のみならず世界中にネットワークを持つ我々JCはその強みを活かし「JCによる継続的な支援活動のカタチ」として、「4つの柱」に沿った支援活動を行います。

## 【新たな東北の再生へ向けた4つの柱】

### I 私たちは3.11を忘れない

#### 「復興創造フォーラム」の開催

日本JCでは例年東京の地で開催されていた通常総会を、2012年度より3年間東北の地で行い、併せて「復興創造フォーラム」を開催します。全国のメンバーが東北に集まり、今一度、復興は我々の手で成し遂げる想いを再認識する場とすることにより、震災の風化を防ぎ、東北の復興そして日本の未来創造へ向けた学びを得、さらには、被災地域へ経済効果をももたらす機会とします。2012年は岩手、2013年は宮城、2014年は福島のそれぞれにおいて実施します。

### II 子どもたちの笑顔のために

#### 「笑顔デザインプロジェクト」実施

東日本大震災では、大きな揺れ、津波などの現象や建物の倒壊、多数の死者行方不明者など、目に見える被害や数字だけではなく、震災の恐怖や様々な体験から、根深い心の傷が子どもたちに残されています。日本JCでは阪神淡路大震災の際にも、PTSD（心的外傷後ストレス障害）の症状が懸念される多くの青少年を対象に、数年にわたって全国各地の青少年育成事業へ受け入れるプロジェクト「鐘のなる丘プロジェクト」を実施しました。この経験に基づき、この度の震災によって被災した子どもたちが、全国各地で企画・実施される青少年育成事業に参加し、PTSD症状の軽減と発症予防に努め、子どもたち本来の笑顔や活発な姿をとりもどすべく本事業を行います。この事業は日本JCと各地協議会、各地LOMと協力して実施できる事業であり、JCメンバーが行う支援活動の一つにもなると考えます。

### III 被災JCの力強い再生へ

#### 「JAYCEEの絆 応援団」

JC内において震災による津波の直接的被災は3ブロック・13LOM（2011年12月現在）に及びます。その中にはJC運動を行いたくても十分な活動をする事が叶わないLOMがあります。日本JCは、これらのLOM・ブロックが、今後も地域に頼られ求められるJCとして存続することを目的とし、被災LOMに対し負担金を免除するとともに、3年間にわたり当該地域の復旧復興へ向けた支援活動及び事業資金助成を行います。

### IV 社会的・経済的な「自立」へ

#### BUY made in TOHOKU 運動

被災地域の産品を進んで購入することは、直接的な経済効果のみならず、被災地域の企業に雇用の機会も創出するものであり、社会的・経済的な「自立」への大きな一歩になります。このことはまさに青年経済人として取り組むべき復興への継続的な支援活動のカタチです。また、風評被害に苦しむ東北への観光促進も図り、全国のJCメンバーとともに積極的な運動を展開して参ります。



## 【LOM・ブロック・地区協議会との有機的な連携】

震災直後から、全国各地のLOM・ブロック・地区協議会が多くの支援を行い、被災地域に多くの笑顔を生み出しました。しかし、情報が入り乱れ混乱を招いたのも事実です。災害発生時には、地区・ブロック協議会に正確な情報の収集の役割を担って頂き、本会として情報の一元化を行い、情報の流れを「見える化」し情報の共有を図ります。また、地区・ブロック協議会内に、共通の災害ネットワークを構築することにより、支援を求める側と行なう側を有機的に結び付けることができ、被災地域が真に必要なとする支援を迅速に行うことができるものと考えます。

## 【あしがき～まだ見ぬ災害への備え～】

東京帝国大学地震学教授であった今村明恒氏は1905年、震災予防調査会（現・地震研究所）のまとめた過去の地震記録から50年以内に東京で大地震が発生することを予測し、震災対策を訴え続けるも、それが社会問題となり「ホラ吹きは今村」とさえ言われました。しかし、1923年に関東大震災が発生し、結果多くの犠牲者を出すこととなってしまいました。近年でも、震災対策については長期にわたり警鐘されていましたが、その声が届かずに多くの被災者や犠牲者を出しています。これは、「自分のところは大丈夫」という思い込みや、災害に対する警鐘、過去の出来事の風化などが原因であると思われます。逆に、過去の災害に対して風化をさせず、常に高い防災意識を持ち続けていたことで、犠牲者をほとんど出すことのなかった地域もあります。東日本大震災の被害を受けた岩手県釜石市釜石東中学校では、過去の教訓から、地震が起きた時に何があってもまず自分だけでも高台に逃げる「津波てんでんこ」といわれる伝統や、自分がその時に何をすべきかなどを教育の一環として教えたことで、普段から防災意識が高く、その教訓のおかげで生徒222名と隣接する鶴住居小学校361名全員が無事避難することができました。このようなことから、継続的な防災・減災意識の向上と定期的な防災訓練を持つことのできる防災・減災プログラム、実践的な防災訓練の策定が必要であると考えます。防災・減災プログラム教育を行うことで、継続的に防災意識を高めることができ、恒常的かつ実践的な防災訓練を行うことで減災へ繋がるのです。そこで私たちは、阪神淡路大震災、新潟中越地震及び中越沖地震、東日本大震災、台風などから助かった人たちの防災・減災対策などの教訓を生かし、これからの「まだ見ぬ災害への備え」として以下のようなプログラム策定や対策を構築、推進します。ぜひ全国のLOMの皆様には、各々の地域において今後起こり得る「想定外の災害」を想定し、常に万全な備えをされますことを心からお願い申し上げます。

### 1. 地域に見合った災害支援プログラムの構築、推進、実施及び恒常的かつ実践的な防災訓練

- ・ 2011年度防災プログラムを基としたJCメンバーと国民への災害教育
- ・ 高齢者、障がい者などへの対応が迅速にできるよう、行政やコミュニティーとの連携
- ・ 広域災害に対応しうる防災・減災の知識と、各種団体との連携
- ・ 被災者の声（実際に被災した体験談や避難方法）を多くの人に公開

### 2. JC-AID（仮）の開発及び推進

- ・ 4人家族が発災時より数日過ごすことが出来る防災用品であり、かつ各家庭、会社において、災害発生時に救援物資として扱える、備蓄可能な防災グッズの開発及び推進